

## ＜施工規模が日当たり標準作業量に満たない場合＞の数量計算例

● 計算例 1

名称・規格・仕様	単位	設計数量	日当たり標準作業量
ペイント式 実線 白 15cm 供用区間	m	$x_1 = 2,000$	$D_1 = 3,000$

1) 判定

$$x_1 / D_1 = 2,000 / 3,000 = 0.6666 \dots < 1$$

従って、この場合は、 $x / D < 1$ なので、作業量が1日未満で完了する数量の作業に該当する。

2) 積算

$$1 / 2 \leq x_1 / D_1 < 1 \text{ より}$$

標準単価（機・労）は、 $D_1 = 3,000$ m分の金額を計上する。

材料費は、 $x_1 = 2,000$ m分の金額を計上する。

● 計算例 2

名称・規格・仕様	単位	設計数量	日当たり標準作業量
溶融式 実線 黄 30cm 供用区間	m	$x_1 = 80$	$D_1 = 625$

1) 判定

$$x_1 / D_1 = 80 / 625 = 0.128 < 1$$

従って、この場合は、 $x / D < 1$ なので、作業量が1日未満で完了する数量の作業に該当する。

2) 積算

$$x_1 / D_1 < 1 / 2 \text{ より}$$

標準単価（機・労）は、 $D_1 / 2 = 625 / 2 = 312.5 = 313$ m分の金額を計上する。（小数第1位以下四捨五入，整数止め）

材料費は、 $x_1 = 80$ m分の金額を計上する。

● 計算例 3

名称・規格・仕様	単位	設計数量	日当たり標準作業量
①ペイント式 実線 白 15cm 供用区間	m	$x_1 = 500$	$D_1 = 3,000$
②溶融式 実線 黄 30cm 供用区間	m	$x_2 = 250$	$D_2 = 625$
③溶融式 ゼブラ 45cm 供用区間	m	$x_3 = 50$	$D_3 = 450$
④区画線消去（削取り式）15cm 換算	m	$x_4 = 20$	$D_4 = 300$

1) 判定

$$\sum (x_i / D_i) = 500 / 3,000 + 250 / 625 + 50 / 450 + 20 / 300 = 0.7444 \dots < 1$$

従って、この場合は、 $\sum (x_i / D_i) < 1$ なので、作業量が1日未満で完了する数量の作業に該当する。

2) 積算

$$\alpha \times \sum (x_i / D_i) = \alpha \times (500 / 3,000 + 250 / 625 + 50 / 450 + 20 / 300) = 1 \text{ となる } \alpha \text{ を計算する。}$$

$$\alpha = 1.3432 \dots = 1.34 \text{ (小数第3位以下四捨五入, 2位止め)}$$

修正日当たり標準作業量

$$D'_1 = \alpha \times x_1 = 1.34 \times 500 = 670$$

$$D' 2 = \alpha \times x 2 = 1.34 \times 250 = 335$$

$$D' 3 = \alpha \times x 3 = 1.34 \times 50 = 67$$

$$D' 4 = \alpha \times x 4 = 1.34 \times 20 = 26.8$$

$$1/2 \leq \sum (x_i / D_i) = 0.7444 \dots < 1 \text{ より}$$

標準単価（機・労）①は、 $D' 1 = 670$ m分の金額を計上する。

材料費①は、 $x 1 = 500$ m分の金額を計上する。

標準単価（機・労）②は、 $D' 2 = 335$ m分の金額を計上する。

材料費②は、 $x 2 = 250$ m分の金額を計上する。

標準単価（機・労）③は、 $D' 3 = 67$ m分の金額を計上する。

材料費③は、 $x 3 = 50$ m分の金額を計上する。

標準単価（機・労）④は、 $D' 4 = 26.8 = 27$ m分の金額を計上する。（小数第1位以下四捨五入，整数止め）

燃料費④は、 $x 4 = 20$ m分の金額を計上する。

● 計算例 4

名称・規格・仕様	単位	設計数量	日当たり標準作業量
①ペイント式 実線 白 15cm 供用区間	m	$x 1 = 1,000$	$D 1 = 3,000$
②溶融式 実線 黄 30cm 供用区間	m	$x 2 = 500$	$D 2 = 625$
③溶融式 ゼブラ 45cm 供用区間	m	$x 3 = 50$	$D 3 = 450$
④区画線消去（削取り式）15cm 換算	m	$x 4 = 20$	$D 4 = 300$

1) 判定

$$\sum (x_i / D_i) = 1,000 / 3,000 + 500 / 625 + 50 / 450 + 20 / 300 = 1.3111 \dots > 1$$

従って、この場合は、 $\sum (x_i / D_i) > 1$ なので、作業量が1日未満で完了する数量の作業に該当しない。

2) 積算

標準単価（機・労）①及び材料費①は、 $x 1 = 1,000$ m分の金額を計上する。

標準単価（機・労）②及び材料費②は、 $x 2 = 500$ m分の金額を計上する。

標準単価（機・労）③及び材料費③は、 $x 3 = 50$ m分の金額を計上する。

標準単価（機・労）④及び燃料費④は、 $x 4 = 20$ m分の金額を計上する。

● 計算例 5

名称・規格・仕様	単位	設計数量	日当たり標準作業量
①溶融式 実線 黄 30cm 供用区間	m	$x 1 = 400$	$D 1 = 625$
②区画線消去（ウォータージェット式 溶融式）15cm 換算	m	$x 2 = 100$	$D 2 = 600$

1) 判定

※区画線消去（ウォータージェット式）に関しては、他の標準単価と一連の作業とは考えずに判定する。

$$x 1 / D 1 = 400 / 625 = 0.64 < 1$$

$$x 2 / D 2 = 100 / 600 = 0.1666 \dots < 1$$

従って、この場合は、 $x 1 / D 1 < 1$ 、 $x 2 / D 2 < 1$ なので、それぞれ作業量が1日未満で完了する数量の作業に該当する。

2) 積算

$$1/2 \leq x 1 / D 1 < 1 \text{ より}$$

標準単価（機・労）①は、 $D_1 = 625\text{m}$ 分の金額を計上する。

材料費①は、 $x_1 = 400\text{m}$ 分の金額を計上する。

$x_2 / D_2 < 1 / 2$ より

標準単価（機・労）②は、 $D_2 = 600\text{m}$ 分の金額を計上する。

**※区画線消去（ウォータージェット式）の施工規模が日当たり標準作業量に満たない場合は、標準単価×日当たり標準作業量を計上する。**

● その他

- ・本取扱は土木工事標準単価の「区画線工」及び「高視認性区画線工」のみに適用する。
- ・変更設計における数量算出にあたっても同様の取扱いとする。
- ・「施工規模が日当たり標準作業量に満たない場合」の設計計上数量は、「土木工事数量算出要領（案）」によらず、上記により算出した値をそのまま設計計上数量として用いること。